

小学生を対象とした集団社会的スキル訓練の効果

・標的スキルと社会的適応指標の関連に焦点を当てて・

人間教育専攻

幼年発達支援コース

吉田和樹

指導教員 浜崎隆司

問題と目的

近年、学級集団を対象とした集団社会的スキル訓練（以下、集団 SST）が注目されている（藤枝ら，2001）。これまで、集団 SST は単に社会的スキルを獲得させるだけではなく、子どもの社会的適応を促進することを最終的な目標とする（金山，2000）という指摘をもとに、研究が積み重ねられてきた。しかし、これまでの集団 SST に関する研究では、標的とされた社会的スキルの獲得が、社会的適応指標の改善や向上をもたらすことを確認することなしに、標的スキルの選択が行われていることや、改善すべき社会的適応指標にどの社会的スキルが寄与していたのかについての分析が行われていないことが問題点としてあげられる（石川ら，2007）。

これらの問題点をふまえ、石川ら（2007）は時間経過に伴う社会的スキルの変化と社会的適応指標の変化との関連を検討した。その結果、ソーシャル・サポートを高め、学校不適応感を改善するためには、児童が「仲間強化スキル」と「先生との関係スキル」の獲得が望ましいことが明らかにされた。

したがって、本研究では、学級を対象とした集団 SST が児童の社会的スキル、ソーシャル・サポート、学校不適応感に及ぼす効果を検討することを目的とした。なお、SST で取り上げる標的スキルは「仲間強化スキル」「先生との関係スキル」であった。

方法

研究協力者は、H 小学校第 5 学年 61 名だった。

プログラムは全 3 回行い（第 1 セッション：気持ちをわかって働きかける～友達ふやそう大作戦～、第 2 セッション：あたたかい言葉かけにチャレンジ～お腹が痛い友達に対して～、第 3 セッション：あたたかな言葉かけにチャレンジ～上手に先生に質問しよう！～）、集団 SST の効果を検討するため、「社会的スキル（仲間強化・規律性・社会的働きかけ・先生との関係・主張性・葛藤解決）」「ソーシャル・サポート（友人・担任教師・担任以外の教師）」「学校適応感（学業・友人関係・先生との関係）」の質問紙調査を実施した。調査時期は、プログラムの前後、さらに、プログラム終了 4 か月後にフォローアップ調査を行った（介入前：Time 1，介入後：Time 2，フォローアップ：Time 3）。

結果

集団 SST が児童の社会的スキル、ソーシャル・サポート、学校適応感に及ぼす影響

集団 SST は児童の「仲間強化スキル」「先生との関係スキル」「友人からのサポート」「友人関係に関する適応感」にポジティブな影響を与えていた。また、仲間強化スキル得点については、集団 SST の効果が介入終了 4 か月後まで維持されていた。しかし、先生との関係スキル

得点、友人からのサポート得点、友人関係に関する適応感得点は集団 SST を行った Time 1 と Time 2 の間に上昇していなかった。

初期の社会的スキルの程度が集団 SST の効果に及ぼす影響

近年の集団 SST に関する研究では、SST 実施前に測定した社会的スキルや社会的適応指標の得点の程度によって、集団 SST の効果が異なるという指摘がなされている（藤枝・相川，2001）。そこで、本研究においても藤枝ら（2001）と同様に、初期の社会的スキルの程度によって、社会的スキルへの集団 SST の効果が異なるかどうかを追試的に検討した。

分析の結果、集団 SST の効果は初期の社会的スキルの程度が低い児童に顕著にみられた。社会的スキルの獲得がソーシャル・サポート、学校適応感に及ぼす影響

集団 SST による社会的スキルの変化と社会的適応指標の変化との関連を検討した。その結果、仲間強化スキルと主張性スキルの獲得は友人関係に関する適応感を高めることが示唆されたが、分析のモデルの妥当性は示されなかった。

総合考察と今後の課題

本研究で実施した集団 SST は児童の社会的スキル、ソーシャル・サポート、学校適応感にポジティブな影響を与えたといえよう。しかし、先生との関係スキル、友人からのサポート、友人関係に関する適応感については、集団 SST を行った Time 1 と Time 2 の間で効果がみられなかった。原因として考えられるのは、先生との関係スキルを取り扱ったプログラムの時期であろう。先生との関係スキルを取り上げたプログラムは全 3 回のプログラムのうち、最後の

授業で行った。そのため、先生との関係スキルの向上が質問紙調査に反映されるのにタイムラグが生じたためであると考えられる。友人からのサポート、友人関係に関する適応感が集団 SST を行った Time 1 と Time 2 の間で向上がみられなかったのは、社会的スキルの獲得が社会的適応指標の改善につながるのにタイムラグが生じるという King et al. (1997) の指摘が当てはまるだろう。先生からのサポート、先生との関係に関する適応感の改善がみられなかったのも、先生との関係スキルの向上にタイムラグが生じたため、質問紙調査に集団 SST の効果が反映されなかったと考えられる。

また、初期の社会的スキルの程度が集団 SST に及ぼす影響について検討したところ、初期の社会的スキルの程度が低い児童に顕著に集団 SST の効果がみられた。この結果は、先行研究（吉田ら，2008）とも一致しており、介入前の個人差について研究を深めていく必要があるだろう。

さらに、石川ら（2007）と同様に、社会的スキルの獲得がソーシャル・サポートと学校適応感に及ぼす影響について検討した。その結果、社会的スキルの獲得が社会的適応指標を高めることが示唆されたが、分析のモデルの妥当性は示されなかった。今後はサンプル数を増やして再検討する必要があるだろう。

最後に、SST に関する研究は、社会的スキルを高めることを目的としているが、「他者の気持ちを理解できるから、どのようにいじめれば、他者が苦しむかわかる」という松尾（2010）の指摘もあることから、今後は、ただ社会的スキルを高めるだけでなく、社会的スキルを適切に発揮できるようなプログラムの作成および検討が必要となるだろう。